

## 農工間資金移動の分析による中国の転換点の発生傾向の検証

広島大学大学院 奥田麻衣

広島大学 石田三樹

広島大学 越智泰樹

近年中国の経済規模が大幅に拡大しており、世界全体に与える影響も年を追うごとに大きくなっている。GDPも増加の一途を辿っており、2006年度のGDPは実に1980年度の約48倍、1995年度と比較しても3倍の規模であった。中国のGDPの推移を見てみると1980年代半ばから上昇を始め、1990年代初頭から年を追うごとに増加している。また対前年比成長率の推移を見てみると1980年代の半ばまではほぼ安定して成長しているが、1988年頃をさかいに成長の様子が一変していることが分かる。安定して成長を続けていた状態から、1988年頃に一旦成長率が落ち込みそこから1990年代初頭に向けて対前年比GDP成長率が1991年度22.1%、1992年度34.0%、1993年36.0%と驚異的な増加を見せている。

一般的に、経済が発展する初期の段階ではなかなか実質賃金が上昇しない。これは農村に膨大な「過剰労働力」があり、都市の賃金が上昇すると彼らが都市に移動して賃金の上昇分を取り込んでしまうからである。中国はこの膨大な労働力を利用することによって工業化を進めており、またその安価な労働力の利用を目的に海外からの直接投資も増加してきた。

しかし、その一方で「中国で労働力が不足している」という記述を目にする機会が増えており、世界一人口の多いあの中国で労働力が不足している産業が増加しているという報告も見られる。

本稿では、出稼ぎ労働者の急増にも拘らず労働力の不足現象がおこっているという課題に対して、マクロデータを用い転換点の発生傾向を推計することを通じて中国の産業構造の変化が与えた影響を議論する。

議論の中心は次の4点である。第1に、加藤（1987）の推計によると約1.5億人の過剰労働力が存在し、近年の動向を見ても過剰労働力が減少している傾向は見受けられない。第2に、農業部門流出労働力と実質賃金から推計すると1988年に転換点が見られる。第3に、農工間の資金移動を推計すると、1988年を境に農村から工業部門への資金流出が始まっている。中国の工業化に対し、農村余剰資金が与えた影響を検証する。日本の明治期には、鉄道・電話などの分野で農業部門からの融資が行われた。この農業部門から工業部門への融資が近代部門の成長を促したことが知られている。中国の工業化に対し、農村余剰資金が与えた影響を検証する。第4に、農林水産業に従事する労働者数の推移を検証し、省ごとに転換点を通過した時期を検証する。広大な土地を持つ中国では、省によって特徴が大きく異なるため省別、品目別で分析を行う。